

# アグネスタキオンとマンハッタンカフェが喧嘩する話

黄金モルモット

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

紅茶味のクッキーは少し苦い。

コーヒー味のクッキーは少し甘い。

目次

## 紅茶色の瞳と珈琲色の髪

タキオンとマンハッタンカフェが喧嘩をした。

事に気づいたのは、ある日の昼下り。学園内を移動していた時に、廊下の曲がり角の先から冷静かつ激しい言い争いが聞こえてきた。

その声に不安を覚えて走ると、私の担当ウマ娘であるアグネスタキオンと、彼女と親交のあるウマ娘のマンハッタンカフェが激論していた。

この2人は特別仲が良いわけではない。互いの好みや考えの違いから、意見が食い違う事も珍しくはない。だが、私にはこの状況の異様さがよく分かった。互いの目が、本気で相手を嫌って軽蔑していたからだ。そんな事はこれまで無かった。

「タキオン、マンハッタンカフェ、どうして喧嘩をしているんだ？ 何があつたんだ？」

「君に話す事は何も無い。気にしないでくれ」

「……貴方は、またそうやって……」

「おや、まだその話しをするつもりなのかい」

「はい……まだ、終わっていませんから」

「私としてはもう充分だ。もう、話す事は無いし話したいとも思わない。非常に残念だ」

「……そうですか。では……私も結構ですから」

「それは賢明だね。行こうか、トレーナー君」

「どうぞ……ご自由にしてください」

震える瞳と瞳のぶつかり合いは、その気迫とは裏腹に静かに終わりを告げた。互いが、互いを、拒絶したままで。私はそれにショックを受けた。

トレーナー室にティードリッパーの静かな音が流れる。紅茶の香りも、滴る雫の音も、タキオンを笑顔にはしてくれなかった。

こういう時タキオンは誰とも会話を好まない。なので、私は黙ってタキオンの紅茶を淹れる。

紅茶を飲み干すとタキオンは研究をしてくると一人で部屋を出た。

ついてくるなども聞こえた。

外の曇り空は寂しく、冷たく、悲しい色だ。

アグネスデジタルが私を訪ねたのは、それから30分後の事だ。人気の無い教室に連れて行かれると、そこにはマンハッタンカフェのトレーナーもいた。彼もまた、私と同じような顔をしていた。

「お二方を呼んだ理由は、もう分かりますよね」

いつもの興奮気味の話し方と違い、アグネスデジタルの声は張り詰めたものだった。

「カフェが誰かを拒んだりする事はこれまでにありません。でも、今日のは程度が違う」

「君は、喧嘩の理由を知っているのかい」

「……喧嘩の詳しい原因はあたしにも分かりません。ですが、大まかな内容は分かります」

アグネスデジタルは一呼吸置いて、慎重に言葉を選ぶように視線を落として、それから話した。

曰く、何かの原因で2人の意見が衝突した。

それだけなら普通の事だが、今日は両方が互いのタブーを犯した。触れてはいけないものに2人は触れてしまったのだ。そして軽く振られた拍子にそれを傷つけてしまった。タキオンの限界の先を見る研究と、マンハッタンカフェの大切なあの子の事かもしれない。そう、想像するしかない。

アグネスデジタルは全てを知った上で、それを我々に話すつもりが無いようだからだけだ。

ともかく、その傷は大きく広がって溝を作ってしまった。怒りや憎しみでは収まらず、その生死すら軽んじる程に傷ついた。その最悪だけは避けるために、2人は拒絶を選んだのかもしれない。

相手も、自分も、壊れる結果を防ぐために。

「――私は、仲の良い2人が好きです。相手を傷つけないために、自分を傷つける2人は嫌いです」

私もマンハッタンカフェのトレーナーも、その言葉に深く頷いた。なら、私達には何が出来るのだろうか。答えを探す沈黙を破ったの

は、勢い良く戸を引いたたウマ娘。エアシャカールの声だ。

「小難しく考える必要はねエだろ。ためエ同士が信じられないのなら、その信頼を取り戻させりやあ良いんだよ。つく、無能が」

口はとても悪いが、その直線的思考は幾重の壁に取り囲まれた私達を強引に導いた。

私達4人は端的に意見を述べると、その答えは一致していた。まずは、行動を起こそう。

アグネスタキオンのトレーナー達4人が作戦の準備に取り掛かった頃、2人のウマ娘が暗くなり始めた街を、別々に歩いていた。

学園の門を抜け、並木道を歩き、駅前を通り、オフィス街を駆け、住宅街を歩き、曇り空の隙間から漏れる夕日に染まった川辺を彷徨っていた。

1つの長いベンチに座ると、反対側には見覚えのあるウマ娘がいた。自分と同じ顔をしていた。

一方が相手の名を小さく震えて呼んだ。相手はちらりと声の方を見て、少しだけ距離を詰めた。

穏やかな川に光がゆつくりと流れている。

一方が相手の名を小さく震えて呼んだ。相手はちらりと声の方を見て、少しだけ距離を詰めた。

少しずつ晴れた雲の向こうに茜空が見える。

互いは、相手の隣に置かれた紙袋に気づいた。同じ、洋菓子店の紙袋だった。

もう1度、一方が相手の名前を呼んだ。今度は先程よりも大きく相手が距離を詰めた。

手に持つ紙袋からは、紅茶の香りがした。

もう1度、一方が相手の名前を呼んだ。今度は先程よりも大きく相手が距離を詰めた。

手に持つ紙袋からは、コーヒーの香りがした。

2人は肩を合わせて隣に座った。

2人は紙袋からクッキーの箱を取り出した。

2人の眩く声が風に消えた。謝る声も、泣く声も、笑う声も、幸せな声も、風に隠れて消えた。

2人は夕日を見ながらクッキーを食べた。

紅茶色の瞳をしたウマ娘はコーヒーマグが使われたクッキーを齧ると、美味しそうに微笑んだ。

珈琲色の長い髪をしたウマ娘は紅茶が使われたクッキーを齧ると、嬉しそうに微笑んだ。

その後で、大人2人とウマ娘2人が呆然とそれを眺めていた。学園から姿を消した影を追って、心から心配して見つけたのが、甘くとろけるような時間を過ごす姿だったからだ。

目つきの悪いウマ娘は苛立ちから、静かに音を抑えて舌打ちをした。どこか嬉しそうな顔だ。

大人2人は困惑したような、安堵したような顔でその美しい光景を見つめていた。

背の低いウマ娘は、ただ恍惚としていた。

大人の1人が鞆から包を取り出した。不揃いな形のクッキーが顔を見せる。4人は訳も分からずに、その紅茶とコーヒーマグ風味に作られたクッキーを齧った。他にする事が無かった。

紅茶色の瞳が珈琲色の髪に隠れた。白く長い袖が恐恐と黒い服に見を包んだ細身の肩を抱く。

珈琲色の髪が跳ね、黒い耳が硬直した。やがて、ゆっくりと白い服の肩へその腕を回した。

大人2人が声を漏らそうとするのを、目つきの悪いウマ娘が素早く足を蹴って止めた。

背の低いウマ娘は五体投地し、神に感謝した。

暖かい声と、すすり泣く声が、青白い日没後の世界に響いた。強く強く相手を抱きしめていた。

月が照らす道を、目つきの悪いウマ娘と背の低いウマ娘が先導して歩く。トレーナーの肩に乗せられたウマ娘達は、どこか幸せに眠っていた。

トレーナー達の持つ紙袋からは、まだ微かに紅茶と珈琲の匂いがする。